

イエメン・ユダヤ人史

イエメンの諸事及び状態を取り扱う事を試みた著述家達の殆どは、読者に対して、中傷的に記述されることが多いのであるが、この国は未知なるものを発見する段階にある、と感じさせ続けていた。さもなければ、西欧の侵略者達の子孫以外には全く楽しめないようなこの国に関する名声を誹謗する記述であったりした。この事はこれらの西欧人達が自国民に対して、彼らもたらしたものが通常的能力を越えたものである、と考慮するように仕向けたいという願望に帰着するのである。しかしながら西欧人達は既にこの国に精通する前から、この国の富を知っていた。この国を紹介したり、この国に関する名前の選択に対して、理性によるというよりも、西欧の住民の胃袋から付けられた事等が、前述の事実の背後に隠れていたことであった。

イエメンは「名だたるコーヒー産地」とか「乳香」と「没薬、ミルラ：ミルラの樹幹から流れ出るゴム状樹脂を指している、（注1：辞典「マウリド」より）」の国である。また別に「幸福のアラビア」とか、「アラビア半島」とか呼ばれてきたが、アラビア半島南部を指すのにそう言われてきたのであった。これら多くは、いずれも外国の著述家達がこの国に冠した名称である。またこれらの多くは、アラブ民族とまたアラブ化した者達（ユダヤ人やキリスト教徒を指す）の誤りでもあった。彼らは、かつて列強侵攻に追隨していた者達であり、今日未だにアラブのジャーナリズム界においてさえ、特にこれらのジャーナリスト達は、外国のパトロンから財政的な支援を受け、精力的に理性の枠から逸脱しようとしている。外国の資金援助は、アラブのジャーナリズムに対して、西欧の昔の望遠鏡から見た真実を通して、または西欧自身の権益の観点から、もしくは策謀やでっち上げや無責任な行動の扉から、逸脱行為や虚偽の主張の可能性を提供しているのである。時にはこの無責任な行動が、特に明確な結果として、シオニストである（アラブの）敵に利益となることがある。

例えばその試みとして、この国に残るユダヤ系イエメン人達をイエメンから移住させよう、という目的を持つシオニスト諸機構の活動をイエメン国内に浸透させようとしていること等が挙げられる。そしてその事は次のような方法を通して行われる。即ちイエメン国内の政治的意思決定と政治状況に対して、疑問の声を上げさせる方法。もう一つは、例えどんな遠隔からでも、ユダヤ人達はほんの僅かな金額で強制移住させられる可能性がある、と指摘すること。特にこんな策謀は、不満の鬱積がアラブ社会を覆っていた折に、巡らされていた。それはスーダンの前大統領のジャファル・ヌメイリーの取った行動に対してであった。この策謀は、「ファラーシャー」と呼ばれるエチオピア系ユダヤ人を、スーダン各地に設営された幾つかの軍事基地に集め、その後エチオピアからスーダン経由で占領地（イスラエル）まで輸送する計画に、彼を巻き込んだのであった。その上この計画はヌメイリーと全ての利益

享受者達の認知のもとに行われていたのだった。

ユダヤ人達が移住にあたり、苦悩していた要因には以下のものがある。貧困とか、経済的かつ社会的な不平等とか、宗派的な圧力とか、物価の上昇とか、住居の不足とか、恐怖や圧制から自由になりたいという感情がふくれ上がったたり、欺瞞を発見したり、つけ加えてアラビアの諸地域は、自国のユダヤ人達に本来の家に戻れとの呼び掛けを急いでいたこと等が挙げられる。これらの全ての事柄は、シオニストの存在をアメリカ合衆国と共に、以下のような道に歩ませることになった。即ち、移住を拒絶したユダヤ人達のうち、最後の最後まで残った人々に対して、偏見に満ちた情報を流す等の様々な方法を取るようになったのだった。これらは、ユダヤ人達の意識が向上するたびに、また、国際的な權益に対する彼らの理解が深まるたびに行われた。この国際的な權益とは、アラブ国家における西側の權益のために橋頭堡と防御になるように、またその地域のユダヤ人達が何も知らず起爆剤になるように、アラブ圏の心臓部に、この不可思議な存在（イスラエル）を植えつけことを指している。そして、これらの權益の影響の中で最も重要なことは、アラビア諸国及びその隣国において、未だに無秩序や不安や動乱等の状態が継続していることなのである。

アラブの土地のこの奇妙な存在に関しては、我々はその責務を明確見出せる。しかも西欧の權益の奉仕のための継続的な行為と明白さが、その責務に対して存在していることが分かる。しかもユダヤ人達の最大の敵は、かつてまた未だに、これら植民地主義の国々であるにもかかわらず、またユダヤの悲劇はこれらの国々から常に生み出されており、これらの国々こそが、彼らをこの中東の地域に連れて来たのである。そして我々が、この地上でまた一つのアラブ社会において、平安に生活する上での諸宗教の権利を信じ、また尊敬しているにもかかわらず、これらの国々はアラブのウンマ（共同体）との継続する闘争の焦点にユダヤ人達を据えたのである。

また次の事はユダヤ人達の権利である。即ちユダヤの歴史の中で迫害や残虐行為の源泉が何であるかを。それは彼らの本当の敵を知るためであり、アラブ圏において彼らを選ばれるに到った困難な責務の中に存在する不純物を知るためである。

そして世界の国々におけるユダヤ人の罪の代価を支払うことが、何故アラブに義務づけられたのか？また何故アラブのユダヤ人は強制的にパレスチナの地へと移住がなされたのか？しかもそれは、アラブに健康が戻って、出身地に戻って来るように、という集団的な呼び掛けがユダヤ人に向けられたその時に、である。

多くを考えずとも、ユダヤ人は彼ら以外の人々を通じて、次のことを認識しなければならない。即ち我が国のユダヤ人に対する我々の願望は、全ての集団を含む我が社会への愛情から発して来たことを、また同様にその開放、あらゆる形での迫害の手段、根拠を廃絶するこ

とを期待する国民の一員として、また我が人民の一部として、かれらを防衛する上で我々に課せられた義務、言い換えれば彼らの権利より、この願望が発していることを彼らは認識しなければならない。

確かに我々は、彼らを保護し弁護する。そして彼らを唆す不当行為をなくすことを要求する。しかし我々は貪欲な国々がいつも準備している、暗黒の戦争の火種として彼らを残さないためにも、彼らに故郷へ戻ることを求める。

我々は、ユダヤの「聖典」においてユダヤ人が構築し築き上げた、相互矛盾を持ちしかも強化された物語の迷宮に、アラブが留まることを望まない。それはユダヤ人が保持し、お互い同士を結び付けているのであり、ユダヤ人史が描いた大いなる先入観を通して行われているものだからだ。

我々は以下のことに注目すべきである。ユダヤ人や或いは分散した民族が、占領地においては服従を強要する者であり、その歩みは目的に向かって歩み続け、それを正当化する何千もの根拠を、そしてそれと同じ以下の様な根拠を創り出している、ということに。その根拠とは、ユダヤ人の理性を塗り込めてしまい、或いは憎しみを作り出す能力のために、精神の内に浸透するものである。そしてそれ（憎しみ）は、シオニズムの指導部においては、最も重要な実のある手段なのである。そして憎しみが計画的、また民族的なものとなるに至るまで、実際にシオニストは、先ず最初に、古代であろうが、現代であろうが、その宗教的正当性を支援するのである。それはその（シオニズム）保護の下、そして宗教的な正道の上に従わせることを容易にする為に行われる。

例えば、ノアの長兄であるセムが彼の息子カナン（訳者注：実際にはハムの息子）を怒った折の呼び掛けによって、これは具現化するのである。即ち「カナンの子孫は、その兄弟アブラム（アブラハム）の子孫を通じて服従されるであろう」（注2）と。

（注2）「創世記」第9；26「カナンはセムの奴隷となれ」より

憎しみは残り、イスラエルがカナンを支配し、その土地を占領した。そしてこの様に憎しみは、祖父達から父達へ、息子達へ、シオニスト達の存在する国家へと続いている。

占領地のシオニスト達の存在は、以下の様な任務のためと見做されていた。即ちアラブ人が、全てのアラブ人は枠外にいる、と想像しない様にすべきであるというもので、イスラエルが、設定された帝国主義的シオニズムの計画に沿って継続的に活動している、ということに悟られぬことであった。彼らの一部の人々の表現（注3）を借りればこうである。「イスラエルの拡張こそはシオニズム論理の結果であって、シオニズムに対して地域的に拡張しない様に期待する事は、傾斜の上にある水に対して流れるなど期待するのと同じ事だ」

（注3）「ヤドウート・アフルヌート」紙 1974年1月28日号

イエメン・アラブ共和国指導部は既に立場を明確にし、イエメンのユダヤ人が生活している自然的状況に鑑みて、搾取と無知の全ての機会を否定している。そしてこの事は、何回も公表された立場を通じて行われている。最近のものはフランスのガーマ通信社の代表に対しての明確な回答である。

これは、同胞である陸軍大佐アリー・アブドゥッラー・サーリフ、共和国大統領で軍総司令、国民全体議会議長でもある彼が行ったものである。そして我々は既に、この本においてその回答の本文を記載している。この本から我々は、その何章かを「アルマシーラ・アルイエメニーヤ（イエメンの歩み）」と題する機関誌の何巻において、公表した。それは歴史的、民族的、公式的立場の解明を我々に望む声に応えるためであった。同様に我々のもとには知識及び出典が豊富である。我々はそれに向かって全ての能力と、その重要故に、特別な手段をもって努力した。そして不名誉な無能力さ、これについては複数のアラブの図書館が自らの失態を明らかにしているが、その歯止めとして我々は次のことを望んでいる。即ち現実に対する防衛として、そして我々の民族への奉仕として、有益な知識の提供に我々が合意するであろうと。

イエメンのユダヤ人 シオニズム以前と以後

貧困と飢餓そして放浪、それは最近、「ファラーシャー」と呼ばれるエチオピア系ユダヤ人のグループを含んだエチオピア国民を襲ったものだったが、それらの発生の重圧のもとで、シオニズム運動はこの状況を利用し、当初全く隠密理にファラーシャーの輸送作戦を整えることが出来た。この作戦は30年以上にわたるシオニズムの移送作戦のうち最大のものと考えられている。「モーセ作戦」と名付けられた計画に沿って、約12000人のエチオピア人を移住することが合意された。その資金提供は種々のシオニズムの組織やエージェント、そして敵であるイスラエルの友好諸国とその筆頭であるアメリカ合衆国ら受けていた。

我がアラブ民族は、占領地への移住といったシオニズムの様々な計画や目的に対して、連続した苦い経験を持っている。その最たるものがアラブのウンマ（共同体）に対する勢力拡大と敵対行為の遂行の野望である。それは「ユーフラテス川からナイル川までの大イスラエル」という夢よりも更に遠大なものを実現するためであった。そしてシオニズムの思想と1948年以来今日に到るまでのイスラエルの行動は、その任務というものが、敵対の歴史の連続する様々な期間や占領地の存在を生み出した中で現出してきた表裏全ての活動よりも大きく包括的なものであることを確信させている。

1962年9月の革命以来イエメンにおいて、非常に残念ながら、自国にいるユダヤ人達に対

してシオニズムがなしてきた災厄の程度を我々は認識している。しかもこの事はシオニズムと結託したアラブ人の支配者達の援助に依るものであった。アラブ人支配者達は住民の事などは、国内においては虐殺されていようが、国外において放浪していようが、路頭に迷っていようが、騙されていようが、全く気になったことなどはなかった。同様に上記以外の他の者、即ち移住したユダヤ人も、「アシケナージュ」と呼ばれる西欧系ユダヤ人によって、過酷や貧困に喘ぎ侮辱され生活するオリエント系ユダヤ人「セファルデウム」と後々なるだけ（注4）のために、「神に選ばれた民族」の言葉に騙されたのであった。

しかしながら、エチオピアの国民達を襲った飢餓や病気そして飢餓のための死等が、エチオピアのユダヤ人達を同様に襲っていた。

（注4）「イエメンの歩み」誌のインタビュー記事，1985年3月発行第70号

エチオピア当局は国際救援のため、既にこの状況を公表していた。我が国は世界の他の国々と共に、この人道的な呼び掛けの呼応に参画していた。しかしながらシオニズムは、大移住作戦で多くのエチオピア系ユダヤ人達を騙すことに成功した。この事はこれらの移住ユダヤ人達が、彼らに降りかかった大災難の直後に、この移住作戦の虚偽を発見し、自覚したことで立証されよう。そして彼らの多くは この過ちに高価な代償（注5）を払い始めたのである。

（注5）イスラエルや世界の情報筋は1985年2月中旬までに8名のファラージャが自殺したことを確認している。

イエメンのユダヤ人は同胞として暮らしている

先述した様に、イエメンの現状に見られる切実な問題点に対して、それを解く重要な鍵が見出せる。我らの同胞、共和国大統領兼、陸・海・空三軍総司令官兼、国民全体議会議長であるアリー・アブドゥッラー・サーリフ大佐は、仏通信社ガーマの代表との会見で次のような発言（注6）を行っている。紙面に掲載された発言内容は、「イエメン在住のユダヤ人達は、同胞として彼を取り扱っている国家の保護の元で、彼らの祖国であるこの地に暮らしている」というもの。

（注6）「イエメンの歩み」誌のインタビュー記事，1985年2月発行第69号

この返答は歴史的事実を保持した教訓や、祖国と国民に対する我々の現状認識の表明を含み、イエメンの国益に対しての警鐘がなされている。そして（警鐘が与えられる）一番の存在が、在イエメン・ユダヤ人達なのである。彼らは未だにシオニストの誘惑に駆られることなく、30年程前に世に知られたユダヤ人の移送作戦に便乗した人達が、未だに被り続けている苦難にイエメン・ユダヤ人をあわせようとするシオニストの試みに屈することを拒絶した

のであった。

ところで、アラブは以下に述べる幾つかの重大な危機を孕んだ状況に直面していると言わざるを得ない。先ず第一は、嫌悪感を催し、そしてアラブの土地で起きている現状に対し、平常心を欠く感情を増大させている否定的雰囲気の中に織り込まれてしまう危険性。そして第二は、支援を受けているシオニズムの戦略的、植民地主義的、シオニズム的計画を実行することにおいて、最も広範囲に成功を収める為に、この様な状況を利用している占領地の当局者の絶え間無い試みも、危機感迫る重大な火種となっている。この様な局面に臨んで、我々はシオニズム運動が再燃しないうちに、イエメン在住ユダヤ人が置かれている状況と、彼らに対してシオニスト及びイスラエルによって支援されている現在の彼らの活動に関する情報の中で、入手したものを提示する努力をしていかなければならない。それは真実を通して、イエメン在住ユダヤ人の血統を間違いのないものとし、我々が確信し、ヘブライ系のユダヤ人とイエメン在住ユダヤ人との関わり合いはでっち上げだ、と言う反証を挙げる為に、である。

イエメン人の起こり

“HaDa”（ユダヤ教徒になる）から派生して“YaHUD”（ユダヤ人）という言葉は出来た。そして我々は「ユダヤ教徒化した」即ち“HaDa,YaHUD,HauDan”複数形は“HaDUu” 或いは“RaJa’Uu”（彼らは帰還した）もしくは“TaBUu”（彼らは悔いた）と言っている（注7）が、モーセも「げに我々は貴方の元に帰り、哀願する者である」と言っている。また「ヤフード」“YaHUD”という言葉の語源は“YUDHA”（ユダ）から来たものであり、ユダとはヤアコーブの4番目の息子であり、ヤアコーブとはこの名前を付けた人物である。

（注7）辞書「リサーン・アルアラブ」より

彼らは「イスラエル」もしくは「イスラエルの子供達」と呼ばれているが、イスラエルは神の預言者でヤアコーブの別名であるが、それはまたヤアコーブ部族の一氏族の名前と見做されており、ユダの氏族が、バビロンに補囚された後、彼らを総称して「ヤフード」と名付けられるようになった、と言うことに由来している。（注8）

（注8）彼らはモーセの共同体であり、彼らの啓典はトーラーである。彼らの名の由来は、「ユダヤ人、その根源はアブラハムの息子のイスハークの息子のヤアコーブの第4子の名前である。この事はそれ自体、兄弟間に起きた氏族的分裂を指摘している。我々はユダヤ人達が属するヤアコーブの息子達の対立による分裂に関する側面に、深入りすることを好まな

いが、歴史の深遠部から今日までの闘争に関しては、部族的な血統上の明らかな差異にこれらの諸部族は立脚したことがなかった。

イスラームでは聖典の表現として「啓典の民」として説明されているが、「啓典の民」とはユダヤ教徒とキリスト教徒（ナザレ人）という2つの宗派を意味しているが、それは彼らにはそれぞれモーセ5書と福音書という啓典が授けられた故である。更に彼らはセム語族に属している。（注9）

（注9）ノアの息子のサームに関連する。「イスラーム以前のアラビア人史」第1巻参照

イエメンはセム族にとって本来の揺り籠である

セム族の本来の揺り籠と言え、歴史家達はそのことについて様々な学派へと分派している。我々がその学派のほとんどについて手短かに言えば、それは本来の歴史的な出典における混乱から生じたものであるか、または限定された目的のために奉仕することで、真実を歪めたい、という単なる希望があったためである。そして我々はこの認識から疎遠である訳ではない。この認識とはアラブ圏で広まっている歴史的な出典をも含んでおり、アラブの歴史家達の何人かが、注意を払うこともなく学派の罠にはまってしまっている。

歴史家達のグループは、本来の揺り籠がイラク北方のバビロンの地に、また他のグループはアフリカの東方、特にハバシャ（注10）がセム族の祖国であると見なしている。

（注10）古いエチオピアの呼び名

また別の人達は、アラビア半島がセム族にとって最初の揺り籠であるという真実に辿り着いている。また或る人達は、それ以外の結論に辿り着いている。もし我々がイエメンのユダヤ人達が「通行者達」（訳者注：アラビア語でヘブライ語のことを通行者の言葉「イブリーヤ」と言うところから来ている）であり、即ちそれは次のような「通行して来た者」に差異が無い、と言ったとしたら、つまり彼らが、パレスチナからイエメンへやって来る時に、バーク・アルマンダブ海峡を横断して来たとか、或いは彼らがパレスチナへ、ユーフラテスを越えてやって来たとか、またはローマの攻撃の直後である西暦70年に彼らがパレスチナを去ったとか、この様なことに差異が無いと言った場合、いかにしてこれらの主張の間に、またイエメンやアラビア半島の残りの地域におけるユダヤ人達の歴史的な展開の間に、そしてアフリカからこの場所に紅海が形成される前の、アラビア半島の土地の根源や古さとの間に合致させることが出来るのであろうか。

「このためイエメンのユダヤ人は西暦70年のカナン地方に対するローマ人の攻撃が、その

大きな起因となり、半島の外からやって来たのだ」と言う者には警戒を要する。何故なら彼らは元々アラビア半島からパレスティナにやって来たのであり、ユダヤ人はイエメン内の北部、南部にそしてヤスリブ、つまり今日メディーナとして知られている所に存在していた。ヤスリブは当時、アラビア半島北部で最もユダヤ人が多く集まった地区であった。そして彼らはメッカにも存在していた。同様にサヌアの北方、即ち限られた地域ではあったがハーシドに彼らが繁栄した地区があった。それはイスラーム即ちムハンマド以前のことであり、そして史上有名な戦争の前のことでもあった。即ち、この戦いを遂行する責務の為、派遣された使者が行った呼び掛けに応えたアルガサーシナの兵士達と共に、ユダヤ人達を打ち負かしたアルアウス族、アルハズラジュ族の戦争のことである。

(訳者注：

アルアウス族、アルハズラジュ族:アラブ系姉妹部族サバー王朝のマアリブにあったダム崩壊後、メディーナに移住アンサール(ムハンマド支援者)の一派。

アルガサーシナ:前述のマアリブにあったダムの崩壊後ヨルダン東部ハウラーンに定住。キリスト教単性論を信奉し、ビザンチン帝国のシリア国境を守る。)

天啓の諸宗教は偶像崇拜を根絶するために、互いに協調し同等のものとして助け合っていた。またユダヤ人に対する処遇と彼らとの融合を進める呼び掛けについては、使徒の正義のもと、宗教的諸啓典を結集した。又ヤスリブのユダヤ人に対する善き処遇について、ムスリム達が歩むべき道の構成要素が示されていた。ヤスリブで使徒はムスリム達にユダヤ人の女性と結婚するように呼び掛け、彼らと食べ物を交換し、親密さの印としてエルサレムを彼のためのキブラとして採用し、彼らと共にアーシュラーの断食を行った。アーシュラーはそれが「アッラーがその日イスラエルの子等をその敵から救った日である」故に彼らの儀式の日と見做されていた。預言者モーセはその日に断食し、また彼に習ってユダヤ人はその日断食した。

(訳者注:アーシュラー:ノアが方舟を離れた日とされる。シーア派にとってはフセインが、カルバラーで殉教した日でこの地に巡礼し、喪に服す。)

そして彼らと共に使徒はヤスリブで断食し、言った「私は貴方がたよりもモーセについてより語る権利がある」と。そして断食し、その日断食することを命じた。我々の今日においても、ムスリム達のもとにあるスンナ(ムハンマドの行動を規範にした奨励行為)の一部としてこの断食の日は続いている。

「イエメン・ユダヤ人」 P.15～26